

． 2021 年 コロナ禍のロンドン演劇事情

昨年に次いで今年もコロナ禍のためにイギリスへ渡航することができず、再び観劇抜きの「ロンドン演劇事情」を執筆せざるを得なくなった。2020 年 1 月 31 日に第 1 号のコロナ患者が出たイギリスでは、保健当局によると、2021 年 11 月 25 日現在、累計感染者が 10,021,497 人となり、ヨーロッパでは初めて 1,000 万人を超えた。イギリスの人口はおよそ 6,700 万人だから、国民 6~7 人に一人が感染したことになる。このところ一日の感染者が 4 万人を超える日が続いている。死者の累計は 145,281 人と報告されている。日本の累計感染者数 1,727,417 人、死者数 18,362 人と比べても、イギリスでのコロナの猛威がどれほど大きいかわかる。経済を始め、国民生活のあらゆる分野に及ぶコロナの影響は計り知れない。

この 1 年間のコロナ禍に対する政府の対応とロンドン演劇界の動向とを紹介してみようと思う。昨年 11 月 5 日に出された第 2 回目の「外出禁止令 (Lockdown)」は 12 月 2 日に解除されたが、その後の各地域における感染状態は 3 段階 (3 tiers) に分けられ、ロンドンは第 2 段階相当とされた。第 2 段階では「スポーツイベントやライブパフォーマンスにおける観客は許容 (ただし人数制限あり)」となっていて、この規制をもって、劇場の再開が認められることになった。観客数は劇場の客席数の 50%あるいは 1,000 人以下のいずれか少ない方とされている。すぐさま、「外出禁止令」で閉鎖を余儀なくされていた多くの劇場が上演再開予定を発表した。12 月はクリスマスシーズンなので、例年のようにいくつもの劇場で Christmas Carol 劇や Panto (クリスマスお伽芝居) が上演された。ところが、この間、コロナ感染者の数が急増した。クリスマス期間に合わせて 5 日間予定されていた規制緩和もクリスマス当日のみとせざるを得なくなった。12 月 29 日からは連日 5 万人を超える感染者が出た。この状況を憂慮した政府は年明けの 1 月 5 日から 2 月 22 日まで第 3 回目の「外出禁止令」を発表し、不要不急以外の外出の禁止、仕事は自宅勤務が基本、スポーツ施設の閉鎖、学校の閉鎖、劇場の閉鎖、公共交通機関でのマスク着用の義務化などが実施された。外国からの変異株の流入を防ぐため、外国からの渡航者は自国を出国する前 72 時間以内の感染の陰性証明の提示と英国入国後の 10 日間の自主隔離が課せられ、1,750 ポンド (約 25 万円) を支払って隔離中の宿泊代、食事代、検査のパッケージを購入しなければならなくなった。2 月に入るとコロナ感染の情勢が好転し、政府は 2 月 22 日に「外出禁止令」を解除するとともに、規制緩和のロードマップを発表した。計画によると、第 1 段階として 3 月 8 日に学校を再開。第 2 段階では 4 月 12 日に小売店の開店、小規模の野外イベント開催、パブ・レストランでの屋外での飲食が許可される。第 3 段階では 5 月 17 日に劇場再開 (観客は 25%)、パブ・レストランの営業再開、外国への渡航が許可される。そして最期の第 4 段階では 6 月 21 日にナイトクラブの再開、大規模イベントや公演でのすべての制限解除が行われる。

この発表を受けて、各劇場は改めて上演再開の計画を発表した。久しぶりにロンドン演劇界に活気が戻った。主だったものは以下の通りである。

Adelfi Theatre	Back to the Future	8月20日～
Aldwych Theatre	Tina	7月28日～
Apollo Victoria Theatre	Wiked	9月15日～
Bridge Theatre	Bach & Sons	6月23日～
	White Noise	10月5日～11月13日
Cambridge Theatre	Matilda	9月16日～
Criterion Theatre	Amelie	5月20日～9月25日
	Pride and Prejudice	10月1日～
Dominion Theatre	The Prince of Egypt	7月1日～9月4日
Donmar Warehouse	Henry V	6月9日～22日
Duchess Theatre	Cruise	5月18日～6月13日
	The Play that Goes Wrong	6月18日～
Duke of York's Theatre	The Ocean at the End of the Lane	10月26日～2月12日
Fortune Theatre	The Woman in Black	9月7日～
Garrick Theatre	Death Drop	5月19日～7月11日
Gielgud Theatre	The Mirror and the Light	9月
Gillian Lynne Theatre	Cinderella	7月14日～2月13日
Harold Pinter Theatre	Walden	5月22日～6月12日
	J'Ouvert	6月16日～7月3日
	Annax	7月10日～8月4日
Her Majesty's Theatre	The Phantom of the Opera	7月21日～10月24日
London Coliseum	Hairspray	6月22日～9月29日
London Palladium	Here Come the Boys	5月25日～6月9日
	Joseph & the Amazing Technicolor Dreamcoat	7月1日～9月5日
Lyceum Theatre	The Lion King	7月29日～
Noel Coward Theatre	The Comeback	7月7日～25日
	Dear Evan Hansen	10月26日～
Novello Theatre	Mamma Mia	8月25日～
Old Vic Theatre	The Dumb Waiter	7月7日～10日
	Bagdad Café	7月17日～8月21日
Piccadilly Theatre	Moulin Rouge	11月12日～
Prince Edward Theatre	Mary Poppins	8月7日～2月13日
Regent's Park Open Air Theatre	Romeo and Juliet	6月17日～7月24日
	Carousel	7月31日～9月25日

Savoy Theatre	Pretty Woman	7月8日～
Shaftesbury Theatre	& Juliet	9月24日～
Sondheim Theatre	Les Miserables	9月25日～4月3日
St. Martin's Theatre	The Mousetrap	5月17日～
Theatre Royal Drury Lane	Frozen	8月27日～
Theatre Royal Haymarket	Love Letter	5月19日～
	Heathers	6月21日～9月11日
	Only Fools & Horses	10月1日～
Trafalgar Theatre	Jersey Boys	7月28日～10月31日
Vaudeville Theatre	Alyssa: Memories of a Queen	6月7日～13日
	Constellations	6月18日～9月12日
	The Last Five Years	9月17日～10月13日
	Magic Goes Wrong	10月21日～2月26日
Victoria Palace Theatre	Hamilton	8月7日～10月30日
Wyndham's Theatre	Leopoldstadt	8月7日～10月30日

National Theatre では、6月2日から7月24日まで、是枝裕和監督の映画からの翻案劇 After Life をかつての Cottesloe Theatre を改装した Dorfman Theatre で、6月16日から7月24日まで Under Milk Wood を Olivier Theatre で上演する予定である。

Shakespeare's Globe Theatre では、2020年3月18日に劇場の扉を閉めてから1年2か月ぶりに、5月19日から夏シーズンを開催する。シーズンの初期には、観客の密接な接触を避けるために、立見席に客席を設置する予定である。シーズン中に Midsummer Night's Dream、Twelfth Night、Romeo and Juliet を上演する。公演当日に観客の希望によって上演作品を決める「オーディエンス・チョイス」の日を設定するという新しい試みも行われる。屋内劇場の Sam Wanamaker Playhouse では、3人の writers-in-residence が Ovid に着想を得て創作した新作 Metamorphoses が上演される。

Royal Shakespeare Company では、ロンドンの Cambridge Theatre で9月16日から Matilda を再開する。2022年12月まで続演する予定である。同じくロンドンの Barbican で12月31日まで The Comedy of Errors を上演する。本拠地 Stratford-upon-Avon では、敷地内の庭に座席数500の野外劇場を作り、コロナの感染状況によって、座席を減らして、The Comedy of Errors を上演する。Royal Shakespeare Theatre では、Kate DiCamillo の小説を劇化した The Magician's Elephant を2022年1月1日まで上演する。Royal Shakespeare Theatre で Shakespeare 劇が上演されるのは来シーズンに入ってからとなる。

2020年度は開催中止となった Edinburgh International Festival が8月7日から29日まで開催される。今年は野外3ヶ所にパビリオンを立てて、その中で上演することになっている。

こうして劇場側・劇団側は劇場再開の計画を実現すべく、3月、4月とその準備に余念がなかった。コロナの新規感染者は、「外出禁止令」の効果と高齢者から始まったワクチン接種の効果からか、低い数値で安定し、市民はかつての日常生活を取り戻しつつあった。3月末にはテニスクラブやゴルフ場などの屋外スポーツ施設も再開された。この日たまたまNHKのニュース番組を見ていたら、再開されたテニスクラブで人々がプレーを楽しんでいる姿が映し出されていた。目を凝らすと、そこはかつて筆者が会員であった Ealing Lawn Tennis Club のコートで、顔見知りの人たちがインタビューに答えていた。早速、日本のテレビに出たことをメールで伝えた。そして5月17日、待望の劇場再開が実現した。この日上演を再開した劇場はまだ多くはなかったが、徐々にその数は増えていった。

ところが、6月に入ると、これまで1日1,000人台までに減少していた感染者が6,000人台まで急激に増加した。陽性者の96.5%がデルタ株による感染であった。これまでロードマップに沿って順調に進んできた政府の規制緩和が足踏みを始めた。感染状況を重く見た政府は、規制を全面解除する第4段階への移行を予定していた6月21日から7月19日に延期することを決定した。コロナ新規感染者は7月のはじめには1日30,000人を超え、7月半ばには50,000人を超えた。感染者数が高い数値にとどまっていたにもかかわらず、政府は7月19日に規制の全面解除に踏み切った。これで昨年3月23日の最初の「外出禁止令」から1年4ヶ月を経て、コロナによる規制が解除されることになり、人々はこの日をFreedom Dayと呼んだ。コロナが収束する気配を見せないのに規制を解除した政府は、コロナへの対策を法的規制よりは個人の判断に委ねたのだと言ってよいと思う。

コロナの猛威は再開した劇場、あるいは再開しようとしている劇場にも爪痕を残した。キャストや劇団員の中にコロナに感染したものが出ると、感染の拡大を阻止するために、上演をキャンセルしなければならない。London Coliseum で上演中の Hairspray は7月4日から14日まで、Dominion Theatre の The Prince of Egypt は7月12日から20日までと7月28日から8月7日までの2回、キャンセルを余儀なくされた。Freedom Day 7月19日に Gillian Lynne Theatre でオープニングナイトを迎えるはずであった Andrew Lloyd Webber の Cinderella は同じ理由で開場の数時間前にキャンセルしなければならなくなった。Webber は twitter で「Freedom Day が Closure Day になってしまった」と書き込み、悔しさを滲ませた。Cinderella は改めて8月18日に開幕した。そのほか、8月に入って、Lyceum Theatre の The Lion King、Trafalgar Theatre の Jersey Boys、London Palladium の Joseph and the Amazing Technicolor Dreamcoat、Old Vic の Bagdad Café も一時的に公演がキャンセルされた。一方劇場側でもコロナ防衛策を取り始めた。5月17日に再開された St. Martin's Theatre の The Mousetrap では、観客はマスクの着用、体温の測定を義務付けられ、劇場側もクロークを設けず、入場時の手荷物検査も観客と接触することを避け、フォイエーでの混雑を避けるためにプログラムの購入は事前の予約制として客席に届けるなどの措置をとった。ATG (Ambassador Theatre Group) は West End にあるグループ内の10の劇場で、観客に対し、入場時に、ワクチン2度接種済み証明書または検査での陰性証明書を提示することを求めた。Cameron Mackintosh が所有する Delfont Mackintosh 傘下の9つの劇場でも、18歳以上の入場者に対し2回のワクチン接種済み証明書と48時間以内の検査陰性の証明書の提示が求められた。

9月16日には、Leicester Squareの公式チケットブースTKTSが営業を再開し、公演当日の割引チケットを買い求めることができるようになり、演劇愛好家を喜ばせた。11月15日には、他の劇場に遅れて、Playhouse TheatreがCabaretの上演を開始した。これによって、West Endにある37の劇場がすべて再開したことになった。久しぶりでロンドンの演劇界に日常が戻ってきたと思われた。各劇場も来年度の予定を次々と発表していった。ところが11月28日になって、全世界的に広がりを見せ始めた、南アフリカ発のコロナ異種株、オミクロン株の感染者が2名発生したことが判明して、ロンドン演劇界だけでなく、イギリス全土に暗い影を落とし始めた。政府も劇場側も再びの劇場閉鎖は考えないであろうが、オミクロン株による感染拡大の勢い次第で、今後どうなるか全く不透明である。

SOLT (Society of London theatre) によると、コロナによる演劇界の経済的損失は、年間5億700万ポンド(約765億円)から7億2500万ポンド(約1兆1000億円)とされる。政府としても様々な援助の手を差し伸べている。昨年12月には文化復興基金の一環として1億6500万ポンドの緊急融資が11の文化組織になされたが、融資の対象は9000人以上に仕事を提供している「重要性を持つ組織」とされ、演劇関連ではRoyal Opera House、National Theatre、Royal Shakespeare Companyしかその対象とならなかった。2021年度の予算の中で、Furlough and Coronavirus Job Retention Scheme(一時解雇ならびにコロナウィルス雇用維持スキーム)が9月まで延長されもした。イングランドの美術館や劇場が再開する時の支援として4億800万ポンドが計上されもした。劇場が公演をキャンセルした場合に補償する保険はこれまでなかったが、政府は8月に保険組合のLloyd'sと組んで1年間の限定付きでLive Events Reinsurance Scheme(ライブイベント再保険スキーム)を立ち上げもした。しかし政府の援助は十分なものとは言えない。エンターテインメント業界の組合BECTU (Broadcasting, Entertainment, Communication & Theatre Union)が3月に発表した統計によると、コロナ禍で演劇関係者の39%が一度はレイオフ(一時解雇)されたという。16%の人は経済的援助が必要なのに、政府のFurlough & Coronavirus Job Retention SchemeとSelf-Employment Income Support Scheme(自営業者収入支援スキーム)のどちらも対象外となっているという。

演劇界からも自助の努力がなされている。コロナ以降、一番目につくのはネットを通じての上演の配信である。National Theatreはコロナ以前からNational Theatre Liveで世界各地の映画館に上演を配信してきたが、加えてNational Theatre at Homeを立ち上げてネットで過去の上演を配信し始めた。Royal Shakespeare Companyも過去の上演のネット配信を始めた。Shakespeare's Globeでも一部上演の生配信を行っている。そのほかにもOld VicのBagdad Café、Duchess TheatreのCruiseなどいくつかの劇場でネット配信が行われた。いずれも有料だが、少しでも収入を確保すると同時に、コロナで劇場へ足を運べない人々へ演劇を提供し、演劇の灯を灯し続けようとする努力である。Edinburgh International Festivalでは21のプロダクションが無料配信された。9月18、19日にはTrafalgar Squareで、West Endで上演されているミュージカルの人気ナンバーを出演者た

ちが歌う無料のイベント West End Live が開催されたが、そのハイライトも無料配信された。俳優の Ian McKellen は ATG (Ambassador Theatre Group) と演出家の Sean Mathias とともに、新進プロデューサーが出演者に支払う賃金を補助するための基金を立ち上げた。イギリスとアイルランド限定で Amazon Prime Video で配信されている Ian McKellen On Stage のライセンス供与、その他の収入によって基金の額は 500 万ポンドになったという。演出家・映画監督の Sam Mendes は SOLT にイギリス演劇界のフリーランス支援のために Theatre Artists Fund を立ち上げて、これまで 780 万ポンドを交付している。今、演劇関係の組織や劇団、劇場のホームページを開くと、フロントページに必ずといってよいほど「寄付」を要請する言葉が載っている。演劇人の努力に応じて、演劇愛好家である我々もその要請に応えねばなるまい。

本稿執筆中の 12 月 2 日、舞台に映画に活躍したイギリスを代表する俳優 Antony Sher の訃報が報じられた。享年 72 歳。病氣療養中とは知っていたが、まだまだ舞台に立っていて欲しかった。1984 年の Richard 3 世 (Richard III)、1987 年の Shylock (The Merchant of Venice)、1997 年の Cyrano de Bergerac (Cyrano de Bergerac)、2014 年の Falstaff (Henry IV Part 1 & 2)、2015 年の Willy Loman (Death of a Salesman)、2016 年の King Lear (King Lear) を観ることができたが、いずれの人物像も Sher ならではのもので、今でも心に残っている。イギリス演劇界は大切な宝物を失った。

イギリスはコロナ禍に加えて、EU 脱退後の不安定な経済状態を抱えて、政府は難しい舵取りを迫られている。ウィズコロナの時代を如何に生き抜くか、各国がその方策を模索している。世界のどこかでコロナが悪化すれば世界全体に影響が及ぶことになる今日、すぐさまイギリス訪問が可能になるとは思えないが、ロンドンでの観劇が自由に行えるようになることを心から待ち望んでいる。

本稿の執筆にあたっては以下のサイトを利用した。

<https://www.theguardian.com>

<https://www.standard.co.uk>

<https://www.londontheatre.co.uk>

<https://stagecalendarcv19.com>

<https://www.jetro.go.jp>

その他、各劇場のホームページ

(酒井正志 記)